



八巻歯科医院院長(神奈川県)  
山口里恵 ⑨



3月の「横顔紹介欄 10の質問」の中、「患者さんから言われた忘れられない言葉は?」という項目があった。その詳細が今回の話で、師走の声を聞くと、毎年物悲しい気持ちになってしまふ。もう10年ほど前のこと。父の

代からの患者さんがみえ、自分ががんであると告げられた。おしゃれで品の良い彼女は、若いころスナックを経営され、お店は結構はやり、父も常連客の人だったようだ。抗がん剤を飲み、良いと聞くといろいろな民間療法も取り入れて治療されて

義歯の保持や維持のどり方は教科書通りではなかつたが、希望に沿つてなんとか食べる時だけでも入れておける入れ歯を技工士さんと考えて作つた。

そのかいあつて、「念願のちくわぶが食べられるようになつた」ととても喜んでくれて、何

事を終え、寒いなあと思いながら戸締まりをしている時の知らせだつた。

私は大学卒業後、矯正科に残り、専業主婦を楽しんでいた。しかしその後、子供を亡くして失意のうちに何年も過ごし、そろそろ仕事をしたらどうかと父に肩をたたかれ、復帰した。その時、「お嬢ちゃんが後を継いでくれたら、私も安心してご飯を食べられるわ」と応援してくれた

いた。  
彼女は上顎両側臼歯部欠損により「蓋をまたぐ大きな義歯を入れていたが、抗がん剤の副作用による吐き気がつらくて入れられなくなり、「でも大好物のちくわぶを食べたいので、片側だけいいから入れ歯を入れてほしい」と切望された。

力月後かにチェックに来た時、手すき和紙のハガキと手作りのサンドイッチを持ってきてくれた。

治療も順調に進み、体調も落ちて着いて、もう少ししたらまたお店を出すための物件探しをする張り切つっていたが、年末の夕方、突然訃報が届いた。私が仕

つては二重のつらさだつた。今でも仕事場に飾つてある額に入つた和紙のハガキは、私を温かく励まし見守つてくれてい